
GRIM REAPER

雨鱒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GRIM REAPER

【Nコード】

N7101Z

【作者名】

雨鱒

【あらすじ】

「俺と契約を結ぶのならばお前の願いを叶えてやるさ」奈落との死闘を繰り広げ、弥勒と結ばれるはずの珊瑚であったが、その矢先野武士連中に襲われ絶命する。おまけに弥勒と琥珀までもが、連中に殺された。にもかかわらずのうのと過ごす連中に珊瑚は怒りを抱き、その時、彼女の前に死神が現れる…。

エピソード(前書き)

話が進むに連れて恐くなります…。

エピソード

あたしはあの時、何故命を落とさなければならなかったのか…。

宿敵、奈落を倒しあたしは最愛の人と結ばれるはずであった。しかし、奈落以上に悪辣な野武士連中があたしを含め、あの人や弟を殺した。

ああ…、何故あたしがこんな目に遭わねばならないのか…。あたしは連中から恨まれることは何一つしていない…。

にもかかわらず、あたしは命を落とすはめになった。

あたしたちを殺した連中は、何の罪の意識もなく、ゲラゲラと笑いながら悪行を犯している。

何故、あたしが死んで、奴らは無罪放免になるのか…。これが理不尽という奴だ…。

誰もが奴ら罰しないのならば、あたしが罰してやりたい。しかし、この肉体がない今、それは不可能であった。

ああ…、ちくしょー！ 奴らをこの手で血祭りにしてやりたい。誰でもいい、あたしの願いを叶えてくれるのならば…。

エピソード（後書き）

いや〜、「犬夜叉」っていいですね〜。

契約（前書き）

犬夜叉の47巻、泣けますよねえ。

契約

「おい」

誰かが、自分の名を呼び珊瑚は頭を背後へ振り向ける。背後には黒いマントで全身を覆った死神が立っていた。

「お前さん、俺と契約しねえかい？」

死神はカタカタと笑いながら言う。

「あたしと…？」

「なあに、タダとは言わん。お前さんが俺と契約を結ぶ代わりに、俺はお前さんに願いを叶えてやる」

「あたしの願いを叶えるだと…？」

「そうさ、サンゴ…」

死神は彼女の名を言う。

「何で初対面のおんたがあたしの名を知っている!？」

「おかしなことを聞くなあ。俺は黄泉の国の者だぜ。死んだ奴の名ぐらい死っているさ」

死神は彼女の名だけではなく、彼女が元妖怪退治屋ということも知っていた。

そし死因も…。

「お前さんは実に哀れだよ…。最愛の人と結ばれるはずであったが、野武士連中に襲われて、てめえだけではなく、弥勒と琥珀までもが死んだ…。同情するよ」

「一つ、聞いてもいいかい？」

珊瑚は話題を変える。

「ああ、いいよ。何でも聞きな」

「あんたは、あたしがあんたと契約を結べば願いを叶える、と言っただな。それは本当か？」

「あいさ、俺は嘘は言わん。あんたが俺と契約を結んでくれるのなら、何だって叶えてやるよ。例えば、もう一度、生き返るとか、

な」

連中への激しい怒りを抱く珊瑚は、この際、死神と契約しても構わなかった。

あの忌々しい連中を血祭りに上げてやる……。そうでもしなければ自分の怒りが収まりそうにもない。

「どうだい、サンゴ。俺と契約を結べばどんな願いをも叶えてやる。まあ、無理強いはさせないがね……」

そして、

「いいだろう。あんたと契約を結ぼう」

珊瑚は死神と契約を結んだのだ。

「ありがとうよ。さて、あんたの望みは叶えるが、その同時に俺からの依頼も聞いてもらおう」

死神は珊瑚に依頼を持ち出す。

「依頼？」

「そうさ、俺がお前さんの願いを叶えるからには、お前さんは俺の依頼を聞いてもらう。それが契約つてえものだよ」

「確かにね。で、その内容は？」

珊瑚は死神が持ちかけた依頼の内容を尋ねる。

「そんな難しいことじゃねえ。地上にのさばる罪人を百人処刑しろ。殺る奴これと言って指定はないが、時としては、俺が指定する」

それは自分を殺した野武士連中を含めた悪党共を殺せばいい話だ。

「そんな単純なことでもいいのかい？」

「いいよ。で、だ。こいつをお前にやる。こいつで罪人百人を処刑しな」

死神は珊瑚にWバレルのソードオフショットガンと一枚のカードを手渡す。

「このカードは『キル・カード』と言ってな。裏に鎌を持った悪魔が描かれているだろう。お前さんが罪人を一人殺す度に鎌は少しずつ赤くなり、百人処刑した時は鎌全体が赤く染まる。その時、依頼は終了し、お前さんは晴れて地上へ戻れるのよ」

「分かった。あんたがあたしの望みを叶えてくれるのならば、あたしはあんたの依頼通り罪人を百人処刑する」

「クツクツクツクツ…ッ、いい言葉だ。お前さんには期待しているよ。サンゴ」

死神との契約を交わした瞬間、珊瑚は妖怪退治屋ではなくなった。

今の珊瑚は罪人を処刑する死神となったのだ…。

契約（後書き）

らんまの実写版、視聴率悪かったらしいねえ。

復讐の幕開け（前書き）

『完結編』見たかったなあ。

復讐の幕開け

昼間の無人の集落では銃声が響く。

「ギャアアアッ！」

断末魔の悲鳴が聞こえる。見れば珊瑚が自分や弥勒、琥珀を殺した野武士連中をショットガンで射殺していたのだ。

連中の多くは無残な姿に変わり果て、更にもう一人殺され、残り一人となった。

彼に逃げ場はない。

「お、俺が悪かった…。命だけは助けてくれ…」

野武士は珊瑚に命乞いをする。が、死神との契約で蘇生した珊瑚は、彼を許すはずがなかった。

「お前に聞こう。お前は今まで命乞いをした人間を助けたことがあるか。ある訳がない」

珊瑚は怯える野武士の額にショットガンを突き付け、引き金を引いた。

己の望みは叶えられたが、だからといい、これで終わりではなかった。

珊瑚はこれから罪人を百人処刑しなければならないのだ。

「……」

珊瑚は己の手で処刑した連中の遺体を冷たい視線で見下ろすと、踵を返し集落を後にした。

その頃、楓の村では犬夜叉とかごめ、七宝などが三人の葬式を行っていた。

犬夜叉達は三人の死に涙を流していた。特に雲母は珊瑚と琥珀の遺体が入った棺桶の前で、まるで二人の名を呼びかの様に涙を流しながら鳴いていた。

弥勒の遺体は育ての親である無心の寺に埋葬され、珊瑚と琥珀の遺体は生まれ故郷である退治屋の里に埋葬されることになった。

三人は犬夜叉達にとってかけ替えのない存在であった。特に弥勒と珊瑚は苦楽を共にした仲だから、悲しみもより深かった。

やがて、葬儀が終わって二週間後のことであった。

各地で悪徳連中が無残な姿で殺されるという事件を犬夜叉達は知った。

犯人は妖怪などではなく、珊瑚だ。しかし、犬夜叉達は犯人が珊瑚であることは未だに知らなかった。

復讐の幕開け（後書き）

次話をもっとグロくなります（え？嘘？）。

ジェノサイド(前書き)

犬夜叉の4巻、いいですよね。

ジェノサイド

所持している武器は死神からもらったショットガンだけではなく、元から所持していた飛来骨や鎖付き分銅などでも罪人を処刑していた。

珊瑚が次に向かった先は非合法的な売春を行う、売春宿であった。売春宿を営んでいるのはヤクザ連中であり、連中も死に値するほどの悪行を行っていた。

売春宿で働かせられている娼婦達は好きで、ここにいるのではない。彼女達は何らかの理由でここへ連れて来られたのだ。

「さて、始めるか。ごみ掃除を…」

珊瑚は宿内へズカズカと入る。

「ちよつと、あんた。入るんならキチンと金を…」

カウンターの前に立っていたヤクザは珊瑚の肩を掴み、止めるが、「汚い手であたしに触れるな」

ショットガンを向ける否や引き金を引いた。大きな銃声と共に血が飛ぶ。

銃声を聞いたヤクザ連中は各部屋から飛び出す。

「何だ、このアマ！」

珊瑚は再度ショットガンを発砲し、連中を血祭りにする。

見知らぬ娘の殺人行為に宿内はたちまちパニックに陥り、珊瑚は平然として殺人を繰り返し返す。

床や壁は血で濡れ、珊瑚は一室の引き戸を蹴破り、中で嫌がる娘と性行為を行おうとしていたヤクザにショットガンを発砲し、頭部を破壊した。娘は悲鳴を上げる。

「この野郎！」

刀を持ったヤクザが背後から珊瑚に斬りかかった。

踵を返し、ショットガンを発砲する。ヤクザは地面に倒れピクピクと蠢く。宿内には未だヤクザ共が残っており、珊瑚は連中を根絶や

しにするまで、ジェノサイド行為をやめないだろう。

今の珊瑚は本格な死神なのだから…。

空のシヨットシエルが転がり落ち、床にはヤクザ共の死体が転がっている。

宿は珊瑚という娘の手によって地獄絵図化したのだ…。

ジェノサイド（後書き）

次話で犬夜叉達は珊瑚と再会します。

再会（前書き）

犬夜叉は珊瑚と再会を果たしますが…。

再会

銃声は外まで響いており、宿の前を野次馬が覆う。

しかし、誰一人と中の様子を見ようとする者はいない。

たまたま近くを通りかかった犬夜叉達は野次馬達に歩み寄り、「何が起こっているのか？」と尋ねる。

が、誰も中へ入っていないのだから、中で何が起こっているかは分からないが、銃声や断末魔の悲鳴が聞こえるから、恐ろしいことが起きていることは確かだ。

「ん？」

犬夜叉は何かの二オイを察知した。

「この二オイ、珊瑚の二オイだ……」

「ええ?!」

かごめと七宝は一瞬、驚きの表情を浮かべる。珊瑚はもう死んだはずだ。

まさか、死人がこの宿で騒ぎを起こしているのか？

「かごめ、お前は七宝とここにいろ。俺は中へ入って様子を見て来る」

犬夜叉はかごめを七宝と入り口前に残し、野次馬を押しつけながら宿内へ入った。

「な……っ?!」

宿内は既に悲惨な状況となっており、血と火薬の二オイが充満していた。

こんなむごいことを珊瑚がやったのか……。考え難いが、中には珊瑚の二オイもあった……。

「た、助けてくれー!」

別の一室で身を隠していたヤクザが室内から飛び出し、犬夜叉に助けを求める。

「おい、この宿で何が遭った…」

「素性の知らない女が入って来て、見たことのねえ銃を乱射しやがった…。おかげで、皆死んだ…」

犬夜叉はその娘の特徴を尋ねる。

すると、彼の背後から足音がし、ビクツとなる。

犬夜叉は、

「ここにいろ」

ヤクザを再度別の部屋へ入れさせた。

犬夜叉は鞘から鉄砕牙を抜いた。

「！」

数秒後、足音の持ち主が犬夜叉の前に姿を現した。

その持ち主は紛れもなく珊瑚であった。

「珊瑚……」

彼女は死んだはずでは…。

「久し振りだね、犬夜叉…」

珊瑚はニコリと微笑むが、その目は凍てついており、犬夜叉は今の

珊瑚が、自分の知る珊瑚ではないことを悟った。

「お前、死んだはずじゃ…」

「一度はね、けど、生き返ったのさ…」

生き返っただと、誰が珊瑚を蘇生させたというのか…。

「あんたとは久々にゆっくり話したいけど、そうもしていれなくてね…」

踵を返すと、ヤクザをかくまっている部屋の戸を蹴破った。

「ヒッ、ヒイッ！」

珊瑚に見付かったヤクザは悲鳴を上げる。「こんなところに隠れていたとはね。残念、あたしに見付かった以上、死んでもらうよ」

珊瑚はショットガンを向け引き金に指をかけた。

「よせ、珊瑚！」

犬夜叉は珊瑚に飛び付き、珊瑚の殺人行為を制止する。

「な、何をする。犬夜叉！」

「お前、何考えているんだ。こんな無差別殺人なんてやらかして！」
「うるさい、こいつらは罪人だ。罪人は一人残らず根絶やしにしてやる！」

犬夜叉は珊瑚と取っ組み合いを演じた。

「……」

二人のやり合いに見とれていたヤクザに犬夜叉は、

「何をしている。さっさと逃げろ！」

犬夜叉の言葉にヤクザは入り口へ足を走らす。

「逃がすか！」

珊瑚はシヨットガンを向ける。

「やめろ！」

犬夜叉は珊瑚の手を掴み天井へ上げる。その拍子に珊瑚は引き金にかけていた指にグツと力を入れてしまい、銃声が鳴る。

「放せ！」

珊瑚は腕部分に仕組んであるナイフ（暗器）を出し、犬夜叉の頬を切り付ける。

「うおっ！」

切られた拍子に犬夜叉は珊瑚を制止していた手の力をゆるめ、珊瑚は犬夜叉の腹部に膝を入れた。

「ぐおっ」

珊瑚から離れた犬夜叉は咳き込む。

「…あんたとは出会わない方がよかつたね…」

「何…？」

珊瑚は腰を上げ、

「あんたとは以前までは味方同士だったけど、あんたがあたしの行動を邪魔するのならば、あんたを敵と見なす」

珊瑚は鋭い視線を向けた。

「命が惜しければ、あたしのやることに邪魔をしないことだね」
そう言うと、珊瑚は姿を消した。

「おい、待て。珊瑚！」

珊瑚の言葉は脅しでもハツタリでもない。本気だ。
「珊瑚……」

再会（後書き）

ふうく眠いな。

良心の呵責(前書き)

珊瑚ちゃん、いいですねえ〜。

良心の呵責

「よう」

あたしと契約を交わした死神がヒョコツと姿を現した。

「久々に仲間と再会出来て嬉しかったかい？」

「別に…」

「あれま、素っ気ねえ返事なこと。まあいい。お前も分かっているかもしんねえが、奴らはお前の行動を妨げるだろう。となれば元仲間とは言え、容赦なく殺れ」

「分かっている…」

自分が死神と契約を交わしたからには仲間達に牙を向かなくてはならない。

ただ、彼らが自分の行動を妨げない限りだが…。

「そうだ、『キル・カード』を見せな。どれだけ殺ったか確かめさせてもらおうか？」

珊瑚は死神に言われた通り『キル・カード』を見せる。

「ふ〜ん、結構やつたらしいなあ」

悪魔が持つ鎌の半分が赤く染まっていた。珊瑚は犬夜叉達と再会するまでに多くの罪人を血祭りに上げて来たのだ。

「いやあ、上出来、上出来。この調子じゃお前さんは早く地上に戻れそうだな」

死神は珊瑚の背中を軽く叩いてほめる。

「そう言えば、こいつもやるよ」

死神は珊瑚に一丁のハンドガンを手渡した。そのハンドガンは凄まじい殺傷力を誇るデザートイーグルであった。

デザートイーグルは今、使っているショットガン以上の威力がある。「それじゃあ、俺は戻るよ。用事があるんでな」

死神は珊瑚の前から姿を消した。

死神の依頼が終われば自分は地上へ戻れる。しかし、戻ったところ

で犬夜叉達が再び自分を出迎えてくれるのか。

自分は大量殺人を犯した殺人鬼、言わば罪人なのだ。

多少良心の呵責に触るが、死神と契約した以上、自分は引き返すことは出来ない。

死神と契約したとは言え、珊瑚の心が完全に闇に蝕まれている訳ではなかった。

が、これも自分が望んだ事であり、文句は言えないのである…。

良心の呵責（後書き）

次話で珊瑚がデザートイーグルを使って罪人を殺ります（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7101z/>

GRIM REAPER

2011年12月24日01時58分発行